

だがしや楽校 森のワークショップ

～親子で自然と触れ合おう！～

いつ：2011年8月6日（土）～7日（日）

どこで：南山村芸術学校（山形県大蔵村南山）

主催：だがしや楽校だがしや倶楽部（山形県鶴岡市）

《はじめに》

“だがしや楽校 森のワークショップ～親子で自然と触れ合おう！～”が、2011年8月6日から8月7日の2日間にわたって、山形県大蔵村にて開かれました。

“だがしや楽校”には、子どもたちにとって、学校とは違ったもう1つの自由な楽しい学びの場という意味があります。つまり、子どもたちによつての社会教育の場です。

今回の“だがしや楽校 森のワークショップ”は、子どもたちが、緑に囲まれた山間の地域にて2日間体験活動を行うことで、森や自然のことを学び、生きていくための糧にしてもらうことが目的です。

とは言ふものの、場所は大蔵村でも肘折温泉に程近い、山奥です。実際どんなところか、写真でご紹介しましょう。



左の写真で中央奥に集落が見えます。その集落を拡大したのが右の写真です。ここは山形県大蔵村大字南山の柳渚という集落です。大蔵村役場から直線距離で南南西に約8キロメートルに位置します。肘折温泉はここからさらに南南西へ約5キロメートルに位置します。

“だがしや楽校 森のワークショップ”の会場となった南山村芸術学校（標高 240 メートル）はこの集落の一角にあります。ここからは森林などの陰になっていて、直接望むことはできません。

集落は写真のように山の中腹（標高 235～280 メートル）にあります。（左の写真で最も高い山の標高は約 420 メートル）

写真の下には銅山川が流れていますが、このあたりの地形は、山の中腹や高いところで高原のように平地が広がっているところがいくつかあり、一方で銅山川が流れている谷間は結構険しい地形なため、中腹に集落がつけられたのです。

例えば、次の写真をご覧ください。



左の写真は柳淵の集落から約 1.6 キロメートル南南西に移動したところです。平な土地が広がって畑になっていますが、標高は約 385 メートル。柳淵の集落より高いのです。

ここからさらに先へ進み、ひとつ谷を越えますと、右の写真のように、肘折の集落が見えます。温泉街を中心にした肘折の集落（標高約 290 メートル）は、銅山川沿いですので、一気に下ることになります。（右の写真は北から肘折を望んで撮影したものです。奥の山は葉山です。葉山は山形市からも見えます）



せっかくですので、ここで先に肘折温泉（山形県大蔵村）もご紹介しておきましょう。（実際の撮影は、ワークショップ終了後の 8 月 7 日の夕方です）



夏休みの日曜日ということもあって、温泉街は結構にぎわっていました。

肘折温泉の開湯は807年。1200年以上も前のことです。銅山川沿いに風情あるたたずまいの旅館が軒を連ねる静かな温泉郷、肘折温泉には、22軒（25棟）の旅館があります。



写真のように、まさに風情を感じる温泉街を人力車が通っていきました。その温泉街の脇を流れるのが銅山川です。上流には肘折ダムがあります。



下の左の写真は、銅山川にかかる橋（天狗摩橋）から見た温泉街です。また、右の写真は、北東方向から温泉街を望んで撮影したものです。



肘折温泉は、火山の地形のひとつであるカルデラの中にある温泉です。それで周囲をカルデラの外輪山にあたる山々に囲まれているわけです。銅山川がこの先、深い渓谷を流れるのも、この

ためです。

肘折温泉は、湯治場としても栄えました。そこで、朝5時になりますと、朝市が開かれます。湯治客はそこで食材を買って自炊するわけです。朝市は冬場を除き、今でも開かれています。

肘折は、雪国山形県でも、屈指の豪雪地帯です。私（山口）が住む米沢も豪雪地帯ですが、肘折にはとても叶いません。肘折では毎年3メートル前後の雪が積もり、多い時には4メートルにも達します。米沢の2倍以上です。



ところで、どうして大蔵村南山・柳沢で“だがしや楽校 森のワークショップ”を開くことにしたのでしょうか。

今回の“だがしや楽校”は、森繁哉さんの協力を得て、開きました。

森繁哉さん・・・実は、元東北芸術工科大学の教授で、しかも舞踏家でもあります。

森さんは、地元大蔵村出身です。大蔵村役場の職員を務めたこともある森さんですが、東北芸術工科大学の教授に転身します。東北芸術工科大学では、東北文化研究センターに所属したり、民俗学を専攻し、教鞭を執っていました。

舞踏家としては、土方巽（ひじかたつみ）氏（舞踏家・振付家、1928年3月9日～1986年1月21日、暗黒舞踏という新しいスタイルの舞踏芸術を生み出し広めた功績は今でも高く評価されています）から直接舞踏の指導を受けました。

東北芸術工科大学を退任された森さんは、大蔵村を拠点に、舞踊・芸術活動を展開することになります。まず、南山小学校柳沢分校の校舎である建物を買い取り、“南山座芸術学校”を開きます。さらに、その隣りにある藁葺き屋根の古民家を“すすき野シアター”とします。

ここが、今回の“だがしや楽校 森のワークショップ”の会場になりました。写真でご紹介しましょう。



↑左がすすき野シアターで右が南山座芸術学校



↑左が南山座芸術学校で右がすすき野シアター



↑南山座芸術学校の内部には、いろんな展示があります。



↑2階にはカフェもあります。カフェではアナログレコードをかけて聴くことができます。



↑又三郎美術館と名づけられた部屋です。南山座では、すすき野シアターなどで大道曲芸などを披露しますが、その時に使う小道具です。お面や人形などが展示されています。



↑ 森さん著書の書籍紹介コーナー。
販売しています。



↑ 2階の1室は、柳渚地区公民館です。
この日も地区の住民が集まって会合が開かれていました。



↑ すすき野シアター

森さんは、地域についても研究しています。

書籍紹介コーナーに展示されていたのは、入澤美時氏と森さんの共著『東北からの思考地域の再生、日本の再生、そして新たなる協働へ』です。この中で森さんは「一つところの風景の再生、場所の再生は、私たちの全身を揺さぶり、私たちを鼓舞し続け、私たちを充実させ、私たちを自分の慰安に結びつけていくのです。だからこそ、私にとっても『風景』なのです。ここは、私の身体の反映の場でもあるのです。そしてそれは、あらかじめ予測されている場所では決してありません。予定調和のなかで孕まれる空間ではないのです。常に動き、葛藤している人びとの生きている現場なのです。」(本書 110 ページより、一部抜粋)と地域の再生について書いています。

その森さん、東北芸術工科大学に在籍中、“東北の風景再発見 祭りの風景 風景は踊る・まちの生理と芸能”をテーマにした研究を行っています。この研究の要旨と論点は・・・

街とは何なんなのだろうか。それは、賑やかさと静けさ、光の部分と闇の部分、現金性と人情性、猥雑さと堅実性といった両義性を抱えているが故に街自体なのであろう。街は多様なものを抱え込み、他者の欲望に沿いながらそれを生き生きとした活動に変えて行かねばならない場所で

あり、混沌を内部に含みながら常に他者に開いている場所として認識されるのではないか。そしてそこには、まちの生理があり、芸能性というべき風景の表出が見られる。中心商店街の空洞化や衰退が進む昨今、十数年にわたって実験的に進められている鶴岡市・山王商店街の「山王ナイトバザール」の取り組みに注目し、街の持っている生理性や芸能性を生かした風景のあり方や可能性について考察してみたい。

- ・街が持つ生理性と芸能性
- ・山王商店街の実験から見えてくるもの
- ・近代化商店街施策の矛盾と問題
- ・地域づくりにおける課題と将来の展望

ここまで長々ご紹介してきましたが、ようやく森さんとだがしや楽校だがしや倶楽部との接点が見えてきました。

今回は、森さんが“南山座芸術学校”を開いたこともあり、森さんからだがしや楽校だがしや倶楽部の阿部さん（鶴岡市：公益のふるさと創り鶴岡理事、山王商店街）へのリクエストがあったことから、ここで“だがしや楽校 森のワークショップ”を開くことになったのです。



それでは、8月6日（土）と7日（日）の2日間にわたって開かれました“だがしや楽校 森のワークショップ”の模様をご紹介します。

ただし、私（山口）は所用のため、2日目の8月7日のみの取材・参加となりました。それで1日目（8月6日）と2日目の早朝プログラムについては、阿部さんからいただいた写真によりご紹介します。

2011年8月6日（土曜日）晴れ時々曇り

【だがしや楽校 森のワークショップ・1日目】

1日目のプログラムは、午後1時すぎにスタートしました。



↑最初のプログラムはオリエンテーション



↑森繁哉さん

続いてのアイスブレイクでは、名刺を作って交換しました。
この場所、南山座芸術学校では“度十広場”と名づけられていました。



↑木こりのワークショップ
しめ縄づくりと木こりになったつもりで縄を使ったワークショップです。



バーベキューの夕食です



四ヶ村棚田ほたる火コンサート見学

柳瀨から直線距離で南東へ約3.5キロメートル付近に広がる四ヶ村棚田は、農林水産省が選定する“日本の棚田百選”にも選ばれています。標高300メートル前後という高原に広がる棚田です。柳瀨からは、銅山川の対岸（銅山川の東側）に位置しますので、移動距離としては10キロメートルを遥かに越えるのですが、メンバーはこの日の夜開かれました“四ヶ村棚田ほたる火コンサート”を見学しました。

2006年から開催されているという“四ヶ村棚田ほたる火コンサート”の主催は、四ヶ村地区、棚田保存委員会、肘折温泉旅館組合、大蔵村、山形県最上総合支庁などで構成する四ヶ村棚田ほたる火コンサート実行委員会です。当日は、午後6時30分を過ぎて薄暗くなりますと、約20ヘクタールの棚田に、約1200本のロウソクに灯がともされ、ホタルの光のような雰囲気になりました。コンサートでは、オカリーナ&キーボード・ユニット“breath”が演奏し、幻想的な音色が会場に響き渡りました。

阿部さんも「とても良かった」と言っておられました。



2011年8月7日（日曜日）晴れ時々曇り

【だがしや楽校 森のワークショップ・2日目】

早朝の散歩ということで、古民家を活用した劇場“すすき野シアター”を見学しました。



ここまでが阿部さんからいただいた写真による報告です。



さて、私（山口）が現地に着いたのは、午前8時頃。朝食の準備が行われていたところでした。

間に合って、良かった！！

夏野菜がタップリ入り、とろけるような感じの煮物をご飯にかけて食べました。これで早起きして米沢からここまで移動して来た疲れが飛んでいきます。



ところで、料理担当は、鶴岡から参加されたOさんです。この2日間、最も忙しかったのは、Oさんではないかと思えます。もちろん、みんなで手伝いながら食事の準備をしましたが、それでもほとんど休みなしです。Oさんについては、後ほど写真でもご紹介します。

なお、今回の“だがしや楽校 森のワークショップ”の参加人数は、写真でご覧いただいた通りです。2日目は、私と東北芸術工科大学・大学院のY nさんのお友だち1人が加わりました。



ひと休みした後、いよいよ森のワークショップ・・・山に入ります。



↑ 午前 10 時頃、南山座芸術学校を出発し、すすき野シアターの裏の坂道を登ります。



一端、柳渚集落内の道を進みます。ここでは、森さんから、集落での暮らしについてもお話していただきました。



森さんによりますと、この薪は、村の人たちが、自分たちで山に入り、切ってきたものです。右の写真からも、柳渚集落が山の中腹にあることがわかります。このレポートの最初にご紹介した柳渚集落の写真は、この写真の遥か奥に見える道路沿いから撮影したものです。



↑これから入る森の持ち主・Mさんの住宅です。



↑山に入る前に安全祈願です。



↑いきなり急勾配です。縄で引っ張ってもらって何とか登ります。



↑Mさんです。
急勾配も自力で登ってきました。



↑しめ縄を付けた岩にお参りです。

Mさんは、山でキノコを栽培したり、薪をとったりしながら、生活しています。これが里山の生活であります。里山とは、人と自然とが調和している地域です。



↑ さらに登って、ようやく目的地の森に着きました。



↑ 森の中では、森さんから話をお聞きして・・・



↑ 自分の気に入った木を見つけ、その木の幹の太さを測ったり、木に触ったりして、森を感じました。

また、耳を澄まして、森の中で聞こえる音を感じました。この時期は、セミ時雨ばかり聞こえますが、ウグイスの鳴き声も聞こえてきました。



幹の根元がカーブしているのは、雪の重みによるものです。いかにここが豪雪地帯か、こんなところからもわかります。

さて、森さんに案内していただいた森林は、写真のように、とても整備されていました。太陽の光が森の中まで届き、明るく感じました。これは、下刈りや枝打ちを行うなど、日々の管理が行き届いているからです。しかも感じるのは、日々の生活の中で、素手によって整備されていることです。

森の荒廃が進む中、山形県では、私有地でも、行政の力で整備が進んでいます。森の荒廃は所有者だけの問題ではなく、地域全体の問題だからです。山形県が“やまがた緑環境税”を導入したのも、このためです。これはこれで、やむを得ないことです。

しかし、本来の森と人間との関わりとは、ここに見る森林から学ぶことができるのではないかと思います。

行政の力によって森林整備が進むことは良いことです。しかし、森と人との関わりを保つための取り組みも必要です。そういう意味で、この日の“だがしや楽校 森のワークショップ”は、とても意味があります。

参加された人たちには、このことの一部でも知っていただければ・・・と思います。



つづいては、東北芸術工科大学のお姉さんたちによる“だがしや楽校”です。木の枝や和紙、それに先の“森のワークショップ”で摘んできた草花など使ったのウチワ作りです。





始まるまでは、はしゃぎ回っていた子どもたちですが、真剣になってウチワ作りに取り組んでいます。子どもたちは器用に作っていきます。



出来たウチワで実際にあおいでみます。涼しいかな～・・・。



そう言えば、この日は大蔵村も相当暑いです。私（山口）も汗ビッシヨリになっています。



↑これぞホントの“まったりだがしや楽校”

↑出来上がったウチワです。

そう言えば、“虔十広場”には常に音楽が流れていました。これも芸術家・舞踏家である森さんの演出のひとつなのでしょう。

こうして楽しく遊んでいる内に、お昼をすぎていました。
そろそろお腹が空いてきたかな・・・。お昼は、カレー&バーベキューです。



ウチワ作りに興じた子どもたちは、休むことなく外に出て、お肉を焼き始めました。



写真に写っている男性の方が、先にご紹介した料理担当のOさんです。



みんなで食べると美味しいです。



スイカやメロンも美味しかったです、最も人気だったのは・・・



ミニトマト！ 争奪戦になるほどで、3回出されましたが、アツと言う間になくなりました。なるほど、甘くて美味しいミニトマトでした。

これでお腹も大満足。しばらくは、食後の休憩です。
あとはみんなで後片付けをします。

そして、午後3時30分すぎ、すべてのプログラムが終了し終わりのミーティングが開かれました。

この中で森さんは「2日間、きつい中、森の勉強をしたと思います。里山に住んでいる人たちは、2日間見てきたようにして、身近なところで、怪我をすることもありながら、技を持って、山を育てていることを、勉強していただけたかと思います。また遊びに来てください」と挨拶されました。



最後に、柳瀨の集落を上空からの写真でご紹介します。



“南山座芸術学校”は、下の方に見える縦方向に最も長い青い屋根の建物です。その左隣りに“すすき野シアター”が見えます。

《振り返り》

私（山口）自身は1日のみの参加でしたが、大蔵村南山という地域に於ける里山の暮らしや自然を体験・体感することができて、とても貴重な時間を過ごすことができました。自然・森・里山・地域・舞踏・芸能・芸術などを結び付けた森さん特有の世界に浸ることができたことも、凄い経験になりました。

特に私の場合、山形県内では、森づくりに携わる多くの方々との交流があること、2年間ですが、山形県からNPO分野の代表として委嘱され、“やまがた緑県民会議”の委員を務めたこともあり、森づくりや里山の暮らしにも関心を持っていただけに、学び多きプログラムでした。

参加した子どもたちも、それぞれのプログラムに対して、夢中になって取り組んでいました。お膳立ては必要でしょうが、このように場を設定しますと、今の子どもたちでも一生懸命になって取り組んだり、遊んだりすることを、子どもたちから学ぶことができました。

“だがしや楽校”では、子どもたちが自由な発想で、ウチワ作りに取り組んでいました。東北芸術工科大学のお姉さんたちとも、ジックリと触れ合うことができ、交流を深めていました。ウチワ作りという1つのおみせでしたが、モノ作りや遊びの『深さ』を感じる事ができた“だがしや楽校”でした。

大人たちがお昼寝している脇での“だがしや楽校”は、究極の“まったりだがしや楽校”でした。時間が過ぎていくのを忘れてしまうほどです。

子どもたちにとっても、参加された皆さんにとっても、人間として一回り大きくなられたのではないかと、思います。素晴らしい時間でした。

ただ、考えさせられることもありました。

子どもたちが肉を焼いている場面です。

焼きすぎて黒くなってしまった肉を見て、「これは食えない。投げていいですか」と聞きます。焼いている肉を落としてしまうと、すぐに「これ投げるぞ」と言います。

確かに、黒くなってしまった肉は食べない方がいいでしょう。落ちてしまった肉も食べない方がいいでしょう。

でも、子どもたちが投げようとした肉を私が見ますと、一部は焦げていますが、十分に食べられるものです。下に落ちた肉も、ほとんど汚れておりません。その肉、地面に接した部分を手で拭いて、あとで私が食べました。

それを食べるか食べないかは、それぞれの判断でしょうが、私が申し上げたいのは、何のため2日間にわたり“だがしや楽校 森のワークショップ”を開いたのか、です。

里山の暮らしとは何か。ちょっとの汚れとか、ちょっと汚いとか言っていたのでは、里山の暮らしはできません。

日本人の異常な程の『きれいさへのこだわり』・・・これで良いのでしょうか。

子どもたちの行動は、そんな日本人の意識が伝わってしまった、と感じます。

いつの間に、自然は汚いものになってしまったのでしょうか。この意識を変えることが、人と自然とが調和することにつながります。

子どもたちの行動を見て、2日間では、それを伝えるには、あまりにも短いと感じました。

3回の食事も、子どもたちが手伝うことはあっても、食材を自分で準備してきたわけではありません。だから、ちょっとの汚れでも、投げようとしたのでしょうか。

山川喜市さん（上山市：山川ファーム、命の教育実践者）ではありませんが、肉を食べるとは『命をいただくこと』です。

場所や時間をわきまえずに、ホイッスルをピーピー鳴らす子どもたちも気になりました。これは、そういうことをする子どもたちに問題があるのではありません。

これは、人が嫌がることをやってはいけないことを、今の子どもたちに対して、どのように伝えるのかという、私たち大人に課せられた問題なのです。

これが、私（山口）が“だがしや楽校 森のワークショップ”から学んだことです。

“だがしや楽校 森のワークショップ”は、これまでにないユニークな“だがしや楽校”と言えます。でも、これも“だがしや楽校”です。

私たちは、“だがしや楽校”が日常生活の中に溶け込んでいくことをひとつの目標にして活動しています。それが、人と人との「つながり」「絆」に結び付くからです。

同じように、“だがしや楽校 森のワークショップ”で体験した里山の生活を、どのようにして日常の生活の中に取り入れるべきかについても学びました。

“だがしや楽校”は、『駄菓子屋』や『自分みせ』をキーワードに、かつて見られたという地域での人と人との「つながり」を、現代風にアレンジして取り入れることで、日常生活の中に溶け込んでいくようにしました。

だから、里山の生活を、私たちの日常生活の中に取り入れるには、工夫が必要です。“だがしや楽校 森のワークショップ”は、そのためのひとつのヒントになったと思います。

自然というと、最近は見目の美しさばかりが語られているような気がしてなりません。しかし、本当の自然の美しさとは、見た目ではありません。そのことを知れば、落ちてしまった肉を簡単に捨てることはしないでしょう。それがある意味、本当の「人と自然との共存」です。

まずは、私たち大人が学ぶことです。

“だがしや楽校 森のワークショップ”は、里山の暮らしを通して、普段の生活での“だがしや楽校”について学ぶことができました。

企画・制作・編集・文責

山口充夫

だがしや楽校コーディネーター